



「大阪・関西万博」を通じて都市交通とSDGsを考えよう！

【堺市立新檜尾台小学校 校長 古谷 俊之】

この数年本校は環境に興味がある児童が増えており、5月に「大阪・関西万博」の全校での参加は、保護者は勿論地域の方々も交えて更に環境課題に関する気運を高める機会となっている。その中で事前の調べ学習において、脱炭素社会に向けてCO<sub>2</sub>の排出がない鉄道に注目した児童は、3年前にドイツで世界初の水素を燃料とする「コディアアイリント」という列車が走ったことを知った。万博においてその展示がドイツ館で見られるのではと秘かに期待し、可愛いマスコット「サーキュラー」の音声案内で進んでいった。「エミッションフリー」のコーナーに水素列車の図面展示があり、走行中に放出するのは、「水」と「水蒸気」だけで、動力は水素系燃料電池で環境負荷を全くかけていないことに驚きを隠せないようだった。帰りのバスで、ドイツが脱原発を図り全ての原子炉を廃止しながら人々の生活に深く関わる部分からも環境や循環型社会、持続可能な世界を本気で考えていることを認識し、日本の取組や自分たちの行動を考えなければいけないと友人達と話していたのがとても印象的であった。

本校は昨年度、財団様のご支援を受けながら車中心社会の堺市の都市交通の課題は何かを考えさせ、開催される「大阪・関西万博」を機に身近な地域の循環型社会を全校で考えた。1910年に設立された現存する日本最古の路面電車の意義やSDGs学習においてSDGsの11・13番目の目標に注目して学びを進めた。東西の鉄道はなく、脱炭素化されたバスが少ないバス輸送も環境負荷をかけており、二重の課題がある旨を位置付けた。本年度SDGsと環境問題を身近に考えさせようと校内に大規模な「オリーブの森」を地域と共に作った。地球温暖化による影響の観測、自然との共生、オリーブ搾油後の搾りかすりサイクル等を身近に感じながら、その温暖化が起きている理由と脱炭素社会の在り方を考えるためである。校内環境を整えることにより環境問題が自分事となり、児童同士は勿論地域の多様な人々の対話により、交通課題・エネルギー問題等を将来を担う子ども達に持続的に考えさせる機会とするべく活動している。